

論文の和文要旨

論文題目：「アフリカで作家であるということ

—ベルナール・ダディエ(Bernard Dadié)と

ヴェロニック・タジョー(Véronique Tadjo)

から読む西アフリカのフランス語文学—」

氏名：村田はるせ

これは、コートディヴォワールの二人の作家ベルナール・ダディエ(Bernard Dadié : 1916-)とヴェロニック・タジョー(Véronique Tadjo : 1955-)の作品を取り上げた、西アフリカのフランス語文学に関する研究である。

旧フランス領だった西アフリカ諸国では、現在でもほとんどの文学作品がフランス語で書かれている。これはおもに、コートディヴォワールを含めたこれらの国々が1960年の独立時に公用語としてフランス語を選んだことに理由がある。この地域ではそのため、学校の教育言語もフランス語で、ほとんどの文字情報はフランス語で発信されている。この西アフリカのフランス語文学の始まりは、1950年代に当時フランス領西アフリカだった地域で就学を経験したアフリカ人たちが書いた自伝的な小説に遡る。それ以来この地域では、おもに知識人エリートだけが、多くの場合フランス語で文学作品を生み出してきた。そしていっぽうでは、フランス語は、大多数の人々にとっては、読み書きできない言語であり続けている。こうした文学を生み出してきた作家たちにとっては、書くことは、自分の社会、あるいはより広くアフリカ大陸が抱える多様な困難や悲惨な出来事について考察したり、理解を深めたりするための手段である。そして同時に作家たちにとって作品を書くこ

とは、自分はどのような存在なのか、この地域でどんな役割を果たしているのかを考える過程でもある。この論文では、世代の異なる二人の作家であるダディエとタジョーの作品を読み比べ、それによってこの文学の約五十年の歴史を辿る。それによって明らかにしたいのは、作家たちは何に導かれて書いてきたのか、作家たちにとって書くことそのものにはどのような意味があるのか、そして、作家たちが作品に登場させているアフリカ人たちの多くにとっては、フランス語は読みこなすことができない言語なのに、それでも作品が生まれ続けているのはなぜかということである。つまりは、西アフリカのフランス語圏出身の作家であるとはどのようなことか、ということである。そしてこの中でとりわけ注目したいのは、タジョーが、アフリカの今日の問題にどのように作家として向き合い、そのときにどのような表現と手法を使っているかということである。

本論文の1章では、この文学が誕生したときから今日までの背景と、文学を取り巻く状況について辿る。西アフリカのフランス語で書く作家たちは、ネグリチュード運動の後継者たちといえる。これは、1930年代にフランスのさまざまな植民地からパリに集まった黒人知識人たちが生み出した意識と文学の運動である。フランスは植民地で少数の現地住民に教育を施し、フランスの文化に同化させた。その目的は植民地の業務を補佐する人材を養成することだったが、こうした政策の結果、教育を受けた人々はヨーロッパの価値観や観点から世界や自分自身のことさえ見るようになってしまったのである。ネグリチュード運動を生み出した黒人知識人たちは、この同化を拒否し、詩作を通して自らの存在を表現した人々だった。この運動はフランス領西アフリカの就学経験者（開化民）たちに大きな影響を与えた。この章では、これらの開化民たちが受けた同化教育が実際にはどのようなものだったかについても見ておく。彼らにとってそれは、フランス語やフランスの文化、歴史を学ぶことを強いられ、自分自身の文化からは引き離される経験だった。そして第二次世界大戦後にフランスの植民地の政治的な地位や状況が大きく変化すると、これら開化民のなかから、自らの経験を自伝的な小説として書く人々が現れたのである。おそらく彼らにとっては、書くことは自分の文化や自分の生きる植民地社会について考え、学校教育を経てどのように自分が形成されたのか、どんな役割を負わされてきたかを考察する方法だった。この地域を含めたアフリカでは伝統的に、表現は口承など文字以外の方法で行われたので、書いて表現しようとした彼らにとっては、選択できた言語はフランス語以外にはありえなかった。しかしながら、この地域では諸国が独立した後も、フランスとの間で維持された政治的、経済的な関係のために、フランス語は法制度、政治制度、教育制度な

ど、人々の生活を規定するあらゆる分野で使われ、現代の作家たちもフランス語で書いているのである。

2章ではいよいよ、ダディエとタジョーの人生と執筆活動について見る。ダディエは植民地期のアフリカ人エリートである開化民だった。彼は戦後に反植民地運動に参加し、1950年代に作家活動を始め、自分の経験を1956年出版の小説『クランビエ』(*Climbié*)に書いた。いっぽうタジョーは、彼女の最初の作品を1984年に出版した。彼女はフランスとアメリカに留学し、現在では南アフリカの大学で教鞭をとっている。母はフランス人なので、彼女にとって書くときの言語はまずはフランス語である。この二人の作家を比べると、経験も文化的背景も性別も世代も大きく異なっている。しかし二人には、それぞれの時代には最も高い教育を受け、書くときには、アフリカで現実に行っていることと、アフリカ出身者である自分自身について考察し、掘り下げたいという欲求に動かされているという共通点がある。

3章では、二人の具体的な作品を読み比べる。それらは、ダディエの『クランビエ』とタジョーの1999年出版の『戦いの場 愛の場』(*Champs de bataille et d'amour*)である。二つの作品の舞台が展開する時期は、植民地期と現代というように異なるけれど、それぞれの主人公であるクランビエとエロカはともに教育を受け、その知識を使って自分の社会のさまざまな問題を分析し、現状を変えるための方法を探求することができる人物である。しかしタジョーの描いたエロカは、ダディエの分身のようなクランビエに比べてより孤独で、自分の国の山積する困難を前に無力を感じているように見える。ダディエにとって書くことは、アフリカ人の過酷な暮らしについて証言することであり、そのため『クランビエ』には、ダディエの植民地社会に関する見かたや、同世代のアフリカ人の経験、とりわけ反植民地運動と激しい弾圧が書き込まれた。そして主人公クランビエは結末で、弾圧を受けようとも、自分の参加した運動がフランス政府を揺さぶったので、アフリカ人の未来は明るいと感じている。これに対してタジョーの作品は、確かにアフリカの出来事を動機として書き、とくに近年の紛争の一つである1994年のルワンダの虐殺を取り上げているが、物語の筋が辿りやすく、向かっていく結末が理解しやすい『クランビエ』に比べて難解である。読者は作品のあちらこちらに散らばる、エロカと彼の妻エメの独白を追いかけなければならないのだが、タジョーの文章からはいくつもの意味が読み取れるようで、二人の人物の感じていることや考えていることを理解するのは必ずしも容易ではない。そのうえ二人は、クランビエとは異なり、諸問題が複雑に絡まりあう現代アフリカで、どう未来を

想像すればいいのかも、問題を乗り越える方法は何かということもまるで見通せないようだ。そんな二人にできることは、それまでの自分を振り返り、もの見かたを変えようとし、同じ社会に暮らす他の人々との関係を変えようとするだけである。タジョーの作品では、アフリカの現在の問題に対する解決策が書かれるというより、そこでは読者は登場人物たちと一緒に探求を続けようと呼びかけられるのである。

4章と5章では、タジョーとダディエの表現の以上のような違いをさらに考察するため、それぞれのもう一つの作品を読み比べる。それらはともにコートディヴォワールではよく知られている「女王ポクー」の伝説を題材にしている。このポクーは、コートディヴォワールに約六十ある民族の一つパウレ(baoulé)の始祖とされている人物である。ポクー伝説を文学作品の中で初めて取り上げたのがダディエで、それは1936年に書かれた演劇作品『アセミアン・デレ』(*Assémien Déhilé*)でのことだった。ここではポクーは、逆巻く河をしずめて彼女の民を救うため、一人息子を犠牲に差し出した母親として描かれている。パウレはコートディヴォワールの初代大統領の出自民族であるため、この伝説は同国で普及し、ダディエの後、多くの作家たちがポクーとその犠牲を文学作品で取り上げ、教科書にも書き込まれて子ども達に教えられた。しかし、1990年代の後半以降同国では、政権が主導して外国人や国民の一部に対する排斥が引き起こされ、2002年以降は内戦に陥ってしまった。こうしたなかタジョーは、2004年に彼女の『女王ポクー』(*Reine Pokou*)を発表し、これまでとは異なる複数のポクー像を描いた。4章と5章では、ポクー伝説の起源、ダディエと彼以降の作家たちが伝説を取り上げた意図や背景、コートディヴォワールの一連の危機的な状況の背景について見た後、それぞれの作家の作品を読み比べ、ポクー伝説がどのように書かれてきたかを考察する。実はタジョーは作品で、これまで他の作家たちが書き継いできた、ポクーが差し出したとされる子どもの犠牲を批判している。今日、アフリカのさまざまな地域で紛争が起こり、若者や子ども達が暴力的な実践に参加させられている状況においては、ポクーの出したような犠牲という考えは、取りようによっては、現代の子ども達の犠牲も正当化しかねないとタジョーは言うのである。これらの章においては、タジョーが伝説をどのように分析し、ポクーの犠牲に対する批判をどのように表現したのかを明らかにする。だがタジョーは『女王ポクー』を、たんにそれまで書かれたポクー伝説を批判するためだけに書いたのではなく、読者が物語を読んだときに豊かな世界がたち現れるよう、つまり「読む」という行為とその効果を保障するためにも書いた。それが、現代のアフリカ作家として現実に立ち向かう方法だったのである。ここではその点からも作

品を読み解く。

6章では、タジョーの以上のような姿勢を参照しながら、彼女の執筆活動を再び振り返り、ダディエとも比較しながら、彼女が現代の作家としての独自の観点や表現を示している主題のいくつかを取り上げ、簡潔に論じる。タジョーの諸作品では、広いアフリカ大陸に暮らす人々が、どのように互いを意識し、ともに未来の構想を練り上げられるのかと考えを深める人物の姿を読むことができる。児童文学の分野でも活躍するタジョーは、語り方は異なるけれど、子ども達に対しても同様の問いを投げかけている。この章にはまた、1970年代によく作品を発表し始めた女性作家の歴史の中でのタジョーの特性についての考察も含まれている。

ダディエの時代から現代までを振り返ると、西アフリカのフランス語で書く作家たちは、この文学の始まりから、アフリカ大陸が豊かで、いつも安心して暮らせる土地になることを願って書いてきたことがわかる。そして現代作家タジョーは、彼女に先立つ作家たちから学び取りながらも、独自のスタイルを作り上げ、書き続けようとしている。アフリカの状況はすぐに改善されたり、困難が早急に解消されたりすることはないだろう。しかしタジョーの作品は、起こっていることを多様な側面からとらえることや、求めるべき解決方法は一つではないはずだということを語りかけてくる。